

3. オーラルヒストリーと映像

オーラルヒストリーと映像 – 非文書史料

平田 光司（総合研究大学院大学）

総研大の平田でございます。

私の担当はオーラルヒストリーですが、映像に関してもいろいろ行っておりますので、オーラルヒストリーと映像の現状、および将来計画についてお話しさせていただきます。

1. 非文書史料の価値

オーラルヒストリーや映像は、非文書史料です。アーカイブズの場合、本来は文書を対象としているものですが、歴史の研究では文書だけでは足りないであろうということがあります。

非文書史料には一体どういった価値があるのか。意味のない「くず」である、という立場もあるかもしれません。いわゆるハードヒストリーと言われている分野ではその傾向が強いでしょう。科学史における外的アプローチでは、科学理論の論理的発展に注目しますから論文や報告書などの文書史料がもっとも重要です。しかし、科学は客観性を持つと同時に社会的活動でもあるわけですので、人間としてどのような研究者が行った研究なのか、その人たちはどのような文化の中で生きたのか、科学者はその文化にどのような影響を与えられ、また与えたのか、そのようなことも科学史の研究対象になっていると思います。これは内的アプローチ、文化史といったものです。

第 II 部

社会的な観点があまり極端にいきますと相対主義ということになり、それはそれで困ったことになるわけですが、一方科学の中で何が発見されたのかということだけを追っていても科学という活動を捉えることはできないだろう、ということで、2つの観点は相補的なものだと思います。

科学者も人間ですから、生きた科学者がある時代の文化の中で何を考え、どういう社会状況の中で研究をやってきたのか、血と涙の科学史、といったものもありえるわけです。例えばあるプロジェクトが実現される際、もちろん科学的な議論もあるわけですが、そうでない議論もたくさんあり、無視できないわけです。それらも科学史の観点から見ていかななくてはならない。特に共同利用機関の歴史のようなことをやる場合、ある種の政治的バックグラウンドもカバーしなくてはなりません。KEK（高エネルギー加速器研究機構）で CP 対称性の破れが発見されました、みたいなことだけでは高エネルギー物理学の歴史は語れても、KEK の歴史は語れないでしょう。ソフトな非文書資料も文献資料と相補的なものとしてきちんとおさえておく必要があるのではないかと思います。

知識の中には暗黙知、すなわち文章化できない知識、といったものもあるわけですが、当然こういったものは文献資料になっていないわけです。当時は自明であったことも文章にはなっておりません。昔の記録を読んだとき、時々違和感を感じることがありますが、それは当時は自明であったことが現在はそうでないからです。そういったところも何とかすくいあげていかないと、生きた歴史はできないと思います。

内的アプローチについてみてみますと、昔は優生学みたいなものを真面目で良心的な研究者が悪い遺伝子を撲滅しようと研究を行っていたわけです。今見るととても非人間的で、誤った理解に基づいた研究を行っていたわけですが、その当時の立場にたつてものを考えなおしていく見方も必要なわけです。そうでないと、昔の人は愚かだった、倫

理的でなかった、などのためにそういった行動をとったという結論に
しかならないからです。どのような人たちがどういう思いで研究に関
わっていたのかということが重要になってきます。

共同利用機関の歴史で考えてみますと、今私たちが考えている「KEK
最初の10年」では、最初から国際的には2級の加速器であることは
はっきりしていたプロジェクトにもかかわらず大勢の人たちががんば
って努力してきました。その人たちは何をしようかとがんばってきたのか、
公式な文書には書かれていないので聞き取り調査などを行わなくては
ならない。昔のことなので現在での解釈になってしまうわけですが、何
もないよりはましなわけです。こういったことは文書からではなかなか
わからないことだと思っております。

2. オーラルヒストリー

もちろん、話を記録するだけではだめです。昨日の核融合研の例の
ように、オーラルヒストリーなどで集めた情報が資料と食い違ってい
る場合、食い違っているところが大事なわけですから、そういったこ
ともきちんとわかるような資料があることが前提となります。話を聞
いているだけでは歴史はつくれませんので、両方を相補的にすすめて
いく必要があると思います。歴史を生き生きと再現するということは、
そこに関わった人たちの中である種の物語として残っているわけです
から、それらをたくさん集めることにより、現在を相対化することが
できます。現在のあり方がなぜこうなったのか、などもストーリーの
中に含まれているわけです。こうやって歴史を見る、それによってむ
しろ現在を相対化していくことができる、ということは科学と社会と
いった点からみても非常に大事な視点ではないかと思えます。オーラ
ルヒストリーと「科学と社会」との関わりは強いと思っております。

オーラルヒストリーというものは、記憶を記録することです。記憶
というものは非常に不確実なものであり、よく間違っている。間違っ

第 II 部

もよいわけで、つまりある人が何があったと思っているのか、といったことを記録することが重要なポイントになります。実際にあったこととは違っていてもその人はそう思っているということは事実であり、それがあつた種の意味を持っているのです。どうしてその人はそう思っているのかといったことを考える必要があります。いわゆる歴史的事実、史料的な事実には収まりきらないような、誤りも含んだ記憶を集めていくことが重要であると考えております。

典型的に行われているオーラルヒストリーは、東京大空襲でひどい目にあつた話。どうひどい目にあつたのかといった話をずっとコレクションしていく。被差別部落についても行われておりますけれども、通常はインタビュアーがいろいろな人の話を聞き、その記録を集めて論文を書き、そのあとでは集めた録音などは廃棄するということが通例になっている分野もあるようです。つまりそうすることを前提に話を聞くわけですが、科学者から見ると、こういった貴重なデータを捨てているわけであり、もったいないと思っております。

3. 巨大科学のオーラルヒストリー

巨大科学というものは戦前にはなかつた分野ですが、多くの、多様な人たちが関わります。また、その中で必ずしもサイエンティフィックな分野に限らずいろいろな議論があり、歴史がつくられてきました。実現しなかつたアイデアが公式記録にのこることはありません。アイデア倒れの場合もありますし、潰されたといったこともありえます。そういったものを記録していきたいと考えております。特に人物、当時の文化。KEK ならば高エネ研文化、核融合研であれば核融合研文化、そういったものもあると思うので、それらがどのように形成されたのか。それらを見ることは結局それらがどういったものであるのかを議論することでもあります。そこでは様々な研究者、関係者がおります。必ずしも指導的研究者や所長などばかりでなく、私のようないわゆる下っ端の研究者などの記録も重要です。KEK でも放射線や計算機など

サポート的な部門の人たち、KEK で教育を受けた大学院生、会社から派遣されてきている人、秘書、研究者の奥さん、特に KEK は人里離れたところに村ができて研究者がみな同居していたような状況もあり、その家族や住人、子どもが通っている学校の先生など、その人たちはみな関係者なのです。それらの人たちが集まって KEK をつくったわけですが、同時に KEK はその人たちに何かをもたらしているわけです。作用反作用の法則というものが有りますから、一方的に KEK が影響を受けているわけではなく、その人たちにも影響を与えてきているわけで、そこをくみ上げることが必要です。KEK に関わった人たちのライフヒストリーをアーカイブしていきます。こういったことが KEK その他の基礎科学の研究機関、特に巨大科学・ビッグサイエンスの場合、重要であると思います。

「科学や社会」というときに KEK と日本や世界といった関係も重要ですが、KEK とつくばの住民との関係も重要で、これは少々話が違ってきます。例えば今であれば、小林さんのノーベル賞受賞について KEK のまわりの人たちがどう感じているのか聞いたら非常に面白いとともに重要であると考えます。過去に KEK に関わってもう退職された方たち、他に移られた人たちがどう感じているのか。KEK でひどい目にあったと思っている人たちもいるかもしれないので、そういうのも含めていろいろな人の声を集めておくということはとても大事なことだと思えます。

4. 巨大オーラルヒストリーとアーカイブズ

巨大科学の場合、潜在的なインタビューの対象者はすぐに 1000 名ほどになってしまうのです。到底ひとりの人がインタビューできるわけがありません。そうなると、オーラルヒストリーを収集する方もある程度人数が必要になります。オーラルヒストリーが巨大科学にならなくてはならないということで、これはオーラルヒストリーの分野から見るとものすごいジャンプがあるようです。このためには、データを

第 II 部

個人で専有するのではなく、グループで共有化し、できれば学界全体で誰でも利用できるようなかたちにしておくことが必要となり、アーカイブズが自動的に不可欠なものになります。

これを実行するには2つの方法があります。ともかくオーラルヒストリアンがたくさんいて、みなそれぞれが好きなようにオーラルヒストリーを行いながら集める。相互に討論しながら総合化につとめるという方法 (Incoherent)。もしくは、ある統一した方針にのっとってインタビューを行っていく方法 (Coherent)。これはあまりやりすぎますとアンケート調査のようになってしまい、面白くなくなりますので、両方を含めたようなやり方がよいのではないかと思っております。このような研究は先例も無く、学問的な意味についても不鮮明な点がありますが、画期的な意義があるだろうと内心思っています。

5. KEK 最初の 10 年

KEK 史料室との共同研究ということで、「KEK 最初の 10 年」を進めています。実はできるまでの 10 年の方が断然面白く重要なわけですけども (笑) そこから始めるのはしんどいので、まずは「できてから」で始めていきたいと考えております。ある程度、同質的なデータを取るためには、共通の質問、それからインタビュアーとして特につこんでいきたいところ、オーラルヒストリーの場合は話している最中に面白いところを見つけてそれについて尋ねるといったこともありますので、両方の要素をくんで、一人 2 時間ほどのインタビューを行っていくことを考えております。

特に最初の 10 年に KEK に関わり、その後離れた人たちがインタビューの対象として理想的かと思っております。今いられる方についてはその後のこともいろいろひきずっておられることもありますので、最初の 10 年に焦点をしばったほうがよいと思いました。

これを行った結果を KEK 史料室にて保存・共有化・公開 (研究用) していくことが目論みです。いろいろ技術的な問題もありますので、そこを簡単にするためにはテキストのみ、オーラルヒストリーのトランスクリプション・書き起こしのみを保存していきます。映像を保存しようとも思いましたが、保存する方も大変だということを知っておりますので。その他、最初の 10 年の中心だった Proton Synchrotron (プロトンシンクロトロン) という加速器、これについての映像なども同時につくりたいと思っております。これはパイロットプロジェクトですので、どのような問題が出てくるのか、洗い出しの意味も含めて行う予定です。

既にこの研究の計画段階から問題点が見えるのですが、まずインタビュー者とインタビューされる人との間の信頼関係をどうするのか。個人情報保護や著作権などの問題をどうクリアするのか。それから、アーカイブする方としてもいろいろ問題があります。実例はここで公開できませんが、KEK 史料室として公開するのをはばかれると予想できる資料もあるということです。ある種の同意書をつくることによってこれらの問題点のある程度軽減するというのがアイデアの中心なのですが、ほかにトランスクリプトは話したとおりにはいい間違えも含めて忠実に再現するのか、ある程度ケバをとってスムーズな文章にするのかなど、いろいろと議論があるところです。とりあえずは、すべて忠実に再現する、という方針にしました。

最大の問題点のひとつはインタビューする人が足りないことです。1000 人のインタビューを行うには 100 人ほどインタビュアーがいないと不可能なわけですが、かき集めても 10 人にも足りないということが現状です。日本にはオーラルヒストリー学会というものがありますが、その方たちは東京大空襲などには興味があるのですが、科学研究には現在のところ殆ど関心がないようです。それから、科学史学会ではオーラルヒストリーがまだ重要な研究手法になると思われておらず、理解を得られていない。よってこの人たちを動員することができておりません。インタビューと親近性のあるのは科学人類学や科学社会学です

第 II 部

が、これらの分野は日本では大変マイナーであり、研究者も少ないです。インタビュアーがあまりいないということは最初からわかっていた問題です。一部はアルバイト的に謝金を出すことによって多少はカバーしようと思っておりますが、結局こういうことを行って非常に面白い知見が得られるのであれば、人も集まってくると思います。

また、語り手の権利というものがあるので、これをどうしたらよいのかも考えなくてはなりません。

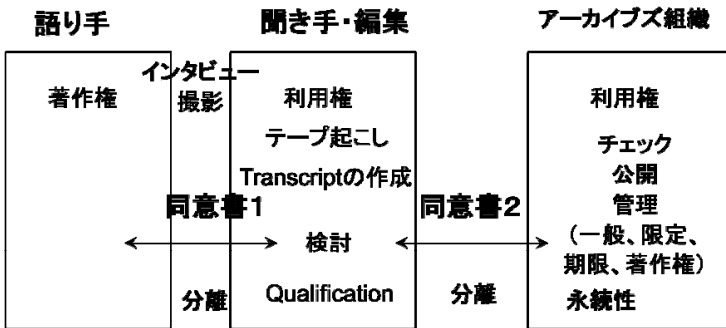
6. インタビューからアーカイブズまで

手順としては、まず語り手、誰から話を聞くのかを決めます。

聞き手・インタビュアーがその人にインタビューするわけですが、この2者間での同意書をつくります（同意書1）。聞き手はオーラルヒストリーのテープ起こしを行い、きちんと文書にし、適当な注釈・事実と違っている点などを付け加え、アーカイブズ組織に委託する、といった流れとなります。そこで聞き手とアーカイブズ組織の間の同意書も必要になります（同意書2）。

これまでアーカイブ組織・史料室がインタビューをするという方式が考えられてきましたが、そのやり方が何かと難しいということが段々わかってまいりました。例えばこれはKEK史料室が行うものです、と決めてしまいますと、語り手、インタビュアー、史料室の権利・義務関係が三つ巴になっているわけですが、その整理が非常に難しい。ある意味ではこの3体問題を2つの2体問題に還元して扱う、というところが新機軸なわけです。総研大オーラルヒストリーグループはオーラルヒストリーインタビューをまとめ、トランスクリプトを作成し、語り手の確認をとるところまですすめます。ここまで行くと普通であればオーラルヒストリーになるわけですが、それをKEK史料室にアーカイブするということによって共有化できると思っております（図参照）。

語り手、インタビュアー、アーカイブズ 3 者の権利に関しては、誰がどういった権利を持っているのかといったことについてよく考えなくてはならないわけです。例えば語り手は言いたいことを言うてしまうことがあるわけですが、公開してしまうとよくないことがあった場合、KEK 史料室の方でここの部分は伏せます、といったことを可能とすることは大事だと思います。ところが聞き手の権利というものもありまして、この人は KEK とは別に自分の判断で研究に使えます、としなければならない。一方、語り手もきちんと責任を持って語ったことなので、一部を隠すなどといったことはまずいのではないかといった意見もあり、これらを全体として調整することは不可能けれども、聞き手は語り手に対してある種の約束をしているわけですから、史料室としては伏せたい部分を自分の研究として発表しようと思えば発表できるわけで、こういった方法でみなさんの権利を保障できる方向へもっていきたいと思っております。



図：語り手、聞き手、アーカイブズの関係

7. 同意書

語り手と聞き手の間の同意書、聞き手とアーカイブ組織の間の同意書についてのお話をいたします。この2つはある意味では独立しており、聞き手・インタビュアーにかなりの責任・主体性を期待するわけであり、以下のようにまとめられます。

第 II 部

- ① 同意書 1 (語り手と聞き手)
 - (1) 語り手は、写真、書き起こしをチェックし、公開しない部分を指定し、それ以降は変更しないことを承諾する。
 - (2) 語り手は結果が資料として保存・公開(アーカイブズ)されることを承諾。
 - (3) 聞き手は語り手との明文化された取り決めに遵守する。
 - (4) 語り手が著作権を持つ。聞き手は利用権を持つ。
- ② 同意書 2 (聞き手とアーカイブズ組織)
 - (1) 聞き手は、語り手が非公開としたところは削除し、時限付き公開の所は明記した原本をアーカイブズ組織に委託する。
 - (2) アーカイブズ組織は(時限つき部分は管理しつつ)原本を公開する。しかし、政治的判断からある部分を非公開とすることができる。この場合、それはアーカイブズ組織の判断であることも明記しておく。
 - (3) 一方、聞き手は語り手が許容する範囲で、原本を公開、研究に用いることは自由である(アーカイブズ組織の制限に拘束されない)。

これで「KEKの最初の10年」をすすめていく予定です。

8. 映像と写真

オーラルヒストリー、聞き取り調査と同時に映像や写真もアーカイブしていかなないと歴史研究といった点では足りないものになるのではないかと考えます。そこで、映像についても私はすすめていただいております。歴史にとって大事なことは、歴史的事実もありますが、どんな人であったのかが重要になります。これはオーラルヒストリーでかなりカバーできます。オーラルヒストリーでカバーできないことは場所の記憶です。それから道具、例えば加速器など、どのようなも

のを使っていたのか、そして風景です。研究所の風景も大事なのではないのでしょうか。こういった風景の中で研究がされてきたのかはいつでもよいというわけにはいかないと思います。例えばキュリー夫人の研究室は、実写の映像を見たことがあるのですが、現代から見ると全然研究所とは思えないような、台所のような場所で行っていたわけです。そういったことを知っているのとキュリー夫人に対する評価も変わってくるのではないのでしょうか。

映像記録としては、まず新しい映像を記録としてつくっていく。記録も作品化するだけではありません。作品化するとなると10時間分撮ってその中の30分だけを作品として使います。作品は結構残るのですが、あと残りの9時間半分の映像は廃棄されたり、もしくは日の目をみないわけです。実はそういったところに貴重な映像が含まれているかもしれないので、撮った映像は全て保存するという方針で行ってまいりました。これまではBファクトリーその他の映像をつくり、その後一部作品化したしました。Bファクトリーの作品「宇宙の始まりの実験」はBファクトリーの人々が大変喜んでくれました。自分たちでコピーしているいろいろなところに配ったそうです。最近ではそれをウェブで使いたいということで、10分程度に編集したものをウェブ上で公開しております。Belleグループがつくっているシンポジウムのホームページからダウンロードできます。

似たようなことを現在村尾さんが中心となって極地研ですすめております。極地研は引越しの直前で、ほおっておくと全部失われてしまう映像を撮っているところです。人物だけでなく、場所、風景などが全て入っている情報として、映像は重要ではないかと思っております。その他、古い映像について、昨日極地研の例がありました。お酢のにおいがしているという映像をどのように保管していくかということはアーカイブズにとっては非常に重要であり、これは物理的な保存という意味です。さらに、どうやってそのフィルムを見つけるのかということもあります。よく知っている人がいなくなってしまうと、1000時間分全てのフィルムを見なくてはならないというようなことを避け

第 II 部

るためにも、これらはアーカイブズとして考えていかななくてはならない問題です。

その他、富田先生のお話にもありました CG などアーカイブズのこのプロジェクトの初期の段階から視野には入っていましたが、マンパワーや予算の関係によりできてはおりません。例えば、昔、原子核研究所にあった日本で最初のシンクロトロン (ES) は現在もう存在しません。つくば移転の際、解体されてしまいました。それがどういうものであったのか、記憶も失われてしまうので、できればこれらを CG で再現していくことをすすめていければと思っております。富田先生に教えていただきながらできたらいいなと思っております。あと、東京湾に沈められたサイクロトロンなども現在図面が見つかっておりますので、科学的な意味でも CG で復元できればとおもっております。

映像や写真の場合、映像権、肖像権、などの諸権利が何かと難しいときがあります。特にカメラマンの権利、これは映像権に入るのですが、その他にも編集権など、それらをみなきちんとクリアしておくことも必要です。過去の映像ではどうもはっきりしないものもあります。自分たちで撮ったものであれば関係ないのですが、例えばその時にプロのカメラマンを使った場合、カメラマンもある種の権利を持っているわけです。それは相応な権利として守らなくてはなりません、その人が全権利を持っているわけでもない。その辺の切り分けはまだ一部課題として残っております。こういうことは訴訟ざたになるということが問題ではないのです。映像なり写真なりを利用する人が安心して利用できることが大事なのです。コピーライトがはっきりしていれば、そこできちんとクリアしておけばよい訳です。公開を原則とするアーカイブズでも、それを利用する場合の権利関係が今後重要なポイントになってくるのではないかと考えており、検討事項のひとつでもあります。



講演のようす

第 II 部

【質疑応答】

佐藤：平田先生の考えておられる最初のコンセプト、文化のようなものを明らかにすることは重要ではないかということについてですが、私がこれまで行ってきた歴史の仕事と非常に近い考え方であると思います。NASA では歴史に関わっているところが行ったインタビューが 3000 件くらい蓄積されています。本部だけではなく各センターで行われたものです。総研大でいってみれば、本部だけでなく各研究所それぞれについて 1000 件くらいずつあるのです。どういう風にインタビューがされてきたのかというと、一番多いのは本を書く契約を研究者がするのです。例えば JPL (Jet Propulsion Laboratory ジェット推進研究所) の歴史をつい最近書いた人によると、大体 3 年から 4 年ほどの契約で、その間はフルにお給料もグラントから出す。従って 2000 万ほどの規模の契約になるとは思うのですが、最終的にその人が本を出すことを目標にあらゆる種類のアーカイブ調査、インタビューもこの場合は最低 100 件ほど行われます。本をうみだす過程でインタビューが行われ、それが研究所のアーカイブに入ります。研究者はそれを書くことによって業績を上げ、その人はカリフォルニア大学に就職いたしました。ポストドクくらいの人に書いてもらうというのが多いそうです。勿論大学の教員にグラントをだしてやってもらうこともあるそうですが、その場合エフォートのどのくらいやられているのかはわかりませんが、多少時間がかかっているようです。10 年くらい。アルバイトのような感覚で謝金を出してオーラルヒストリーを収集しているといった感じではないのです。そういったやり方になると、先ほどの coherent と incoherent のお話がありましたが、どちらかということ incoherent の含みが大きいです。そのかわり研究者が NASA の文化を分析する度にアンケートとインタビューを併用するといったことをやっています。そのための謝金が不足しているという問題をどう解決するのが大きな課題だと思います。

平田：はい、ありがとうございます。アメリカの場合、オーラルヒストリーはかなり組織的に行われています。私の言い方だと Incoherent (インコヒーレント) だけれども多くの人に関わっていたり、アメリカ物理学会でも資金を出して、科学史の学生にオーラルヒストリーをやらせてそれをアーカイブするといったことを行っております。もちろん研究所で科学史のポスドクをやとって歴史を書かせるといったこともやられています。そういったことを日本でもやりたいわけですが、例えば KEK の史料室がひとりでもよいので雇って一生懸命研究していただければ、アーカイブズも進捗し、すばらしいことだと思っております。核融合研でも高エネ研でもなかなかそういうことはできない。専任の教員さえもないで、みな併任で行っているくらいですから。アーカイブズというものに対してもっと予算をつけることができないと、難しいことだと思います。目標はそういったところにあるので、そのためには KEK なり核融合研全体からのサポート、あれは必要であるとか、無いと格好が悪い、といったように感じてもらえるようにする必要があります。別の問題として、今 KEK で予算をつけてひとり雇おうと思っても応募する人がいるかどうか、日本の場合はその問題があると思います。佐藤さんのような方もいるわけですから絶望的ではないとは思いますが。科学史学会やオーラルヒストリー学会にいくと、なかなかそういったことを行ってプロになろうという方はいないようで、その方々のキャリアパスを考えるとそれも難しい問題であると思います。そういう方向にもっていかねばならないということはわかっているので努力をしなくてはならないと思いますが、今すぐ実現できるかどうかとなるとわかりません。

高橋：KEK の場合、つくる時にいろいろ問題がありましたからインタビューももう少しひろい範囲で行なっていくてはならないと考えております。例えば、私は比較的早くにつくばのルーラル・エリヤに住んだわけですが、私が住んでいるところの近所のおじさん、今は亡くなられてしまいましたが、彼は畑で炭焼きの仕事をしておりました。「高エネルギーって何をやられているのです

か？自分は炭を焼いてエネルギーを一生懸命つくっています」と言っておられました。その人は高エネ研の敷地の近くに親戚の方が住んでいらして、「高エネルギー研究所って何だろう、味の素の研究所のように何だかわからないがエネルギーがもりもりと出るような葉をつくっている研究所ですか（笑）？そういうのは何かわからないよね（笑）」などと言っていたわけです。そこで、敷地で最終的に建設するとき、いろいろ問題がありました。オーラルヒストリーのとり方は非常に難しいとは思いますが、研究所等が設置されるにあたってはいろいろあるわけで、インタビューをとれなくなってしまう残念だという例は世界にも有数あります。牛痘による天然痘の予防法を開発するために自分の子供を実験台にしたと言われているエドワード・ジェンナー、麻酔薬の場合の華岡青洲など、当時どうやって達成したのか、そういったオーラルヒストリーが残っていると非常に参考になると思うので、「高エネ研の研究は味の素と同じ」という話も、敷地を割く人から見れば重要なのです。そこら辺にたとえお金をかけてもオーラルヒストリーをすすめていくということは大事なのかもしれません。もうひとつ、私自身が最近関わったことですが、KEKで南部先生のオーラルヒストリーを集録したわけですが、それを撮った時にはまだ南部先生はノーベル賞を受賞されていなかったのですが、南部先生が受賞された際にはそれ以前の先生のオーラルヒストリーを参考にさせてくださいといったお願いを東大などの第三者より受けました。そしてノーベル賞を受賞された後はそういったリクエストがさらに来るようになりました。当時交わした同意書が有効かどうかといった問題もあり、同意書のあり方について教えてほしいと思っております。近いうち、また南部先生とお会いすることになると思うのですが、どのような同意書がよいのか。もちろん、同意書を取り交わして行っているのですが、「研究者でもこの人だけには見せないでください」といったことをインタビューの時に言われて（笑） そうした場合にどうしたらよいのか。研究者だから見せてよいというわけにもいかないと思います。そんな問題があります。

小沼：逆もありますよ。「高橋さんとお話したので、そちらに聞いて下さい」と南部さんに言われている人もいるわけです。

平田：後の方は語り手の権利ということで、見せたくないということもあり、また逆に見せたいということもあるわけですね。この辺をどうするのか、見せたくない方は制限すればよいのですが。同意書は永遠の課題となると思います。アーカイブズの経験がたまってきたら、次は問題が起きないように同意書に追記しておこう、などということも出来るようになると思います。また相談させてください。近所のおじさんの件については、まだご存命の方々もいると思うので、なるべくそういった方たちを掘り出していきたいと思っております。

神田：オーラルヒストリーでは映像を残すためにはかなり意識的に動かなくてはならないと思うのですが、例えば地方の新聞社などのメディアでは著名な人や話題の人のインタビューを撮って保存しています。いろいろ権利の問題などが存在すると思うのですが、それらを調査あるいは収集するというのはどうでしょうか？

平田：オーラルヒストリーを行うときにそういうデータがあれば、あらかじめ見ておくことは必要だとは思いますが、いわゆるジャーナリズムのインタビューというのはオーラルヒストリーとは違う側面があります。それがあるからオーラルヒストリーを行わなくてよいというものではありません。参考としては非常に重要な情報です。雑誌のインタビューがあるからもう行わない、新聞で私の履歴書みたいなものが掲載されているからもうよいか、という、そういう問題ではないと思います。もちろん、2次資料として、そういうものを収集しておくことは重要だと思います。その人が書いたものや新聞記事をふまえた上でインタビューしなくてはならないので、オーラルヒストリーにはかなり時間がかかります。後も大変だけれども、準備も大変です。そう多勢のものは集められません。

荒川：オーラルヒストリーの真髄というのはその方から本音をいかに聞き出すことができるかだと思います。そのため、同意書があれば

第 II 部

本音が出せるのかということ、逆にそうではない面があると私は思うのです。私が電気学会でオーラルヒストリーを十数年行っている方法としては、結局、どなたからお話を伺うのかといったことから問題になっておまして、あの人の話を聞かならばどうして自分のところへ来ないのかといった意見や、どうしてあの人の話を聞くのですかといった批判もできます。そこで、電気学会では名誉員という制度があります。学会で名誉員に推戴された方というと、ある種の権威といったものがあります。そういった方々から本音を聞き出すには、教え子の方を選ぶということがひとつのノウハウとなっております。どうしてかと言うと、語り手がこの人に本当のことを伝えておかないと墓には入れない、といった気持ちになり、本音が出やすくなるからです。ところがそうするとマイナス面、客観的な批判は入りにくくなるので、そこに私のような第三者が何人か入り、学会のデータなどを参照して伺った話の客観的な裏付けを取ります。それを出さ出さないかがもうひとつの問題であり、もし間違いがあった場合、語り手が自分の話を聞いたはずなのに別のデータを付けて出すとは何事か、といったことができます。こういう事にもなりかねないので、要するにそういう条件の中で平田さんの本音を聞くためのノウハウなどを教えていただければと思います。

平田：お教えするほどノウハウがあるわけではないのですが、お酒をいただきながら聞くのがある意味では一番本音かもしれないですね。逆にそれが本当に本音かと言われるすとそれは「本音」かもしれないけれどもそこは限界があると思います。それを後で資料として使うためには与太話ではしようがないわけです。それなりにきちんと考えて話していただくことを記録するしかないと思います。もちろんインタビュアーの才能などによっては非常にうまく話をもっていくことも可能かとは思いますが、それは一種の名人芸だと思います。あまりにも近い人、自分の先生にインタビューすると面白い話は聞けるかもしれないけれども、聞きたくても失礼にあたりと聞かないということもあります。私は直接の関係者でない方がインタビューするのが基本だと思っております。最

初にインタビューするのは畑の違う人が聞いたほうがよいと思います。逆に近い人がそのインタビューの結果をみて、もう少しここを聞いたらよいのではないか、といった意見があればもう一度それをやればよいことです。私は物理屋ですが、物理屋が物理屋に話を聞くと物理関係の話になってしまい、それで時間が終わってしまったりするので、むしろ文化系の方が話を聞いた方がよいオーラルヒストリーができると思います。いろいろとやってみる価値はあるとは思いますが。

荒川：電気学会は良くも悪しくもアットホームな学会なものですから、よその方がくると本音を話さなくなるといった文化を持っています。その点、教え子であれば、ということがありまして。

平田：仲間内の話はそれはそれとして意味のあるデータとして残りますが、オーラルヒストリーの価値といった観点から見ると、それは少々違うことであるといった気がします。もっとも、そのようなインタビューの記録を人文系の研究者が読めば、電気学会文化のようなものが見えてくる可能性はありますね。